

日本橋津大塚

廿五年追善興行

人形絢繡

因之橋畔

交樂莊



# 乍憚口上

晴秋雲無く一億の心も晴れやかに國內隆昌の折柄皆々様も愈々御健勝に遊ばされます段幾重にもお喜び申上げます従つて當座に於ては文樂座の爲め長き生涯に互つて夥しき功績を收められたる近來の巨匠竹本攝津大掾の二十五回忌に相當いたします爲めに其追善興行と仕り豪華なる陣容を備ふるべく例によつて總額揃ひの上に此度叶太夫改め七代目竹本春太夫、角太夫改め五代目竹本重太夫兩名襲名の御披露を申上ぐ可く特に右等に因める秘藏の名狂言を一時に御尊覽に供し古典藝術の妙趣は茲に最大限に發揮さるべく必ずや皆様の御期待に添ふ事と存じまする次第に御座ぬます何卒平素に倍して陸續御來場の程を伏て御願申上げ奉ります

昭和十六年十月一日

四ッ橋

文樂座 敬白

昭和十六年十月一日初日

初日午後二時半開演  
毎日午後三時開演

## ・御觀覽料・

一等席 御一名 金三圓五十錢  
(二階座席三十錢上り)  
二等席 御一名 金一圓五十錢  
三等席 御一名 金六 十 錢  
(各等入場税別)

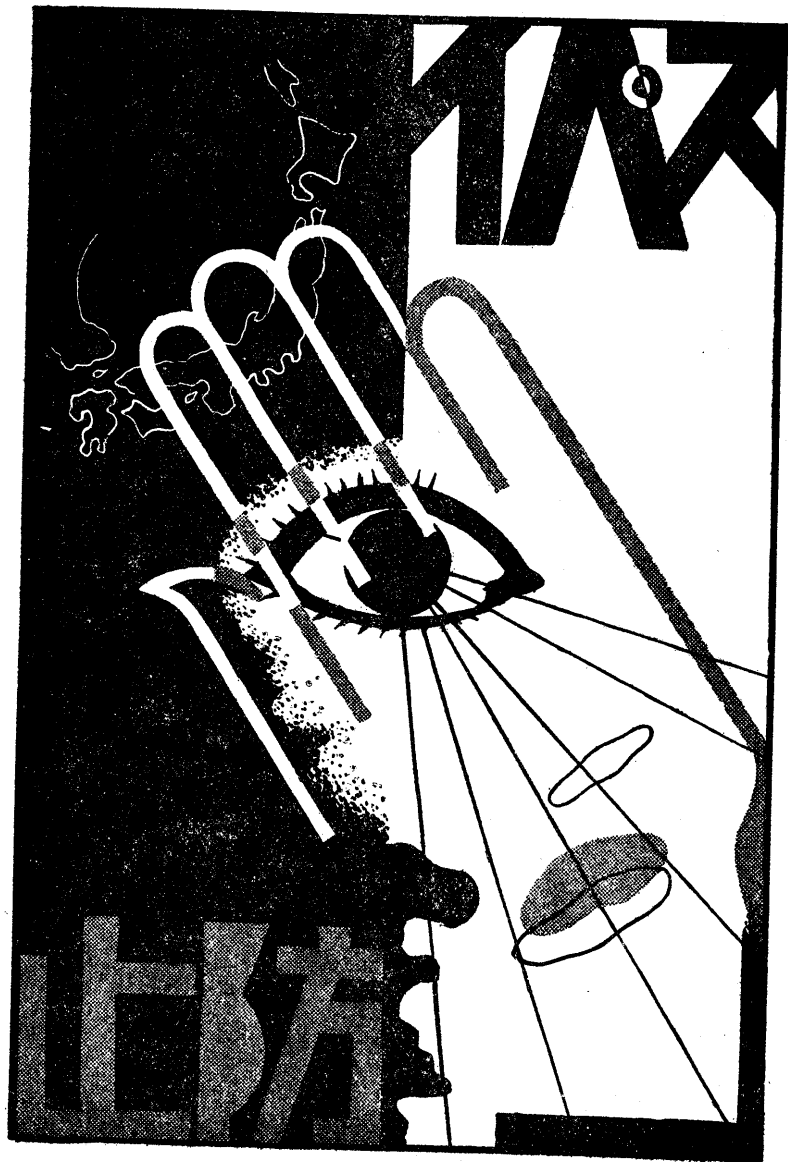
一等御座席 是五日以前より  
一等椅子席

## 前賣切符發賣致居候

前賣切符 專用電話 南 四七壹番  
一般御用 電話 南 三〇三番  
南 三七八番

お草履の準備は御座ぬますが、靴、草履はそのまゝ御入場出來ますから御便利で御座ぬます。

公奉域職・踐實道臣



# 國民精神總動員

盡忠報國

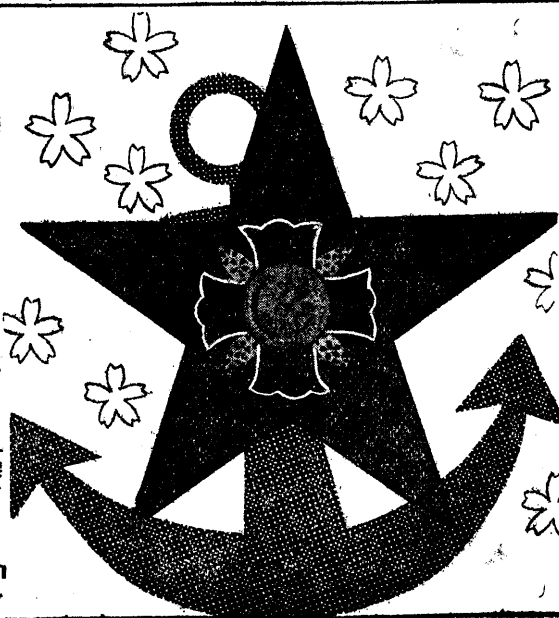
舉國一致

堅忍持久



國を護つた傷兵護れ

傷兵保護院  
國民精神總動員中央聯盟



竹 本 攝 津 大 掾  
 廿 五 年 追 善 興 行  
 人 形 淨 瑠 璃

演出總形人・線味三・夫太

初 日 一 月 十 日  
 毎 日 午 後 午 二 時 半 開 演  
 毎 日 午 後 午 三 時 開 演

| 第 一                                                                                                                        | 第 二                                                                                                  | 第 三                                                                                                                             | 第 四                                                                                                                         | 第 五                                                                                                   |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 蘆屋 <small>あしや</small> 道 <small>だう</small> 滿 <small>まん</small> 大 <small>おほ</small> 内 <small>うち</small> 鑑 <small>かざみ</small> | 日 <small>ひ</small> 吉 <small>よし</small> 丸 <small>まる</small> 稚 <small>おさな</small> 櫻 <small>さくら</small> | 八郎兵衛 <small>おつま</small> 櫻 <small>さくら</small> 鏑 <small>つば</small> 恨 <small>うらみの</small> 鮫 <small>さめ</small> 鞆 <small>たづな</small> | 鷗 <small>ひばり</small> 山 <small>やま</small> 古 <small>こ</small> 跡 <small>せきの</small> 松 <small>まつ</small>                        | 壇 <small>だんの</small> 浦 <small>うら</small> 兜 <small>かぶと</small> 軍 <small>ぐん</small> 記 <small>き</small>  |
| 保名物 <small>たけなな</small> 狂 <small>きやう</small> 別 <small>わか</small> の <small>の</small> 段 <small>だん</small>                    | 小牧山城 <small>こまきやまじやう</small> 中 <small>なかつ</small> の <small>の</small> 段 <small>だん</small>             | 鰻 <small>うなぎ</small> 谷 <small>や</small> の <small>の</small> 段 <small>だん</small>                                                  | 中將 <small>なかつしやう</small> 姫 <small>ひめ</small> 雪 <small>ゆき</small> 責 <small>せき</small> の <small>の</small> 段 <small>だん</small> | 阿古屋 <small>あぐら</small> 琴 <small>かみ</small> 責 <small>せき</small> の <small>の</small> 段 <small>だん</small> |

# 文樂鑑賞手引

文樂の鑑賞に役立ちさうなことを、簡単に、全體的の事についてだけ書いて見よう。

文樂座のこと——人形淨瑠璃の組織とその由來——舞臺のこと——人形の遣ひ方のこと——だいたい、そんな順序で申上げてみませう。

人形淨瑠璃では、文樂がたつた一つの傳存劇團になつてしまつた。地方的、郷土的にはほかにもあるが、常設劇場を有するものと言つてはない。けれども、文樂は寛政年度、おほよそ百五十年ほど前、淡路の人植村文樂軒によつて大阪に生れた劇場である。さうして、この三四十年來は、殆ど

本邦唯一の人形劇團なのであつて見れば、「文樂」が「人形淨瑠璃芝居」の同義語のやうになつたのも當然でせう。古い所では、江戸にも大阪にも、五座七座と人形芝居があつて、歌舞伎に對抗し、時としては、享保から寶暦あたりまでは、つまり二百年前には、人形芝居のはうが盛んであつた。

普通に、三業より成り立つと言はれる。即ち、淨瑠璃を語る太夫と三味線弾きと人形遣ひの三者によつて組織されてゐるからである。ところで、この三者は、初めから一緒に生れて發達して來たかといふに、さうではなかつた。

人形を遣ふといふこと、これはずうつと古くからありました。記録にあらはれた所では、遠く平安時代に傀儡子（くゝつまはし）といふものが見える。傀儡子は、支那の西方、中央アジア地方から漂遊して來た街頭演藝人であつたらしく、平安時代とあれば約一千年の前のことになる。淨瑠璃は足利時代中期の發生となつてゐるから、五百年の歴史と言へるでせう。これに對して、三味線は永祿年中に、琉球から泉州堺港に輸入された蛇皮線の本邦化なのであるから、ザツと三百七八十年前の舶來樂器である。先づ淨瑠璃と三味線とが提携し、慶長の初年あたりに、その淨瑠璃と人形遣ひとが握手して、淨瑠璃といふ物語を、言はゞ立體的に空間的に演奏するやうになつた。これが人形淨瑠璃劇の濫觴だといふことになる。

併しながら、その淨瑠璃界に竹本義太夫があらはれて音楽上の大成を試み、作者近松門左衛門を

得て、戲曲的展開をも試みたのは、元祿時代のことに屬する。爾來二百五十年間、人形淨瑠璃芝居とあれば義太夫節に限るやうになつたのであつたこれは來歴のあらましであるが、淨瑠璃と三味線とによる演奏内容と人形の動作とがピッタリと合致して、三者諧調の美によつて成立する藝術なる點に、先づ御留意ありたい。

次に、人形と人形遣ひのこと。これも歴史的に言ふと、面倒だから、簡単に記す。

人形が手も足もないデクノボーから、肩板が發明され、手、足が生じ、口や眼の開閉や眉の上下が研究され、手の五指が折り屈みをするやうになるまでには、容易ならぬ年月と人知とが費された一個の人形を三人がゝりで、寫實的に遣ふやうになつたのが享保十九年の「蘆屋道滿大内鑑」（葛の葉の狂言）からといふことになつてゐる。今日



から大凡二百年前にあたる。但し、文樂座でもツメ人形（略してツメ）と呼ばれる、ごく下ツ端の役柄のは、一人で一個の人形を遣ふので、原始形式の人形なのです。

現今、文樂座の座頭と呼ばれる吉田榮三とか、吉田文五郎とかいふ上だつた遣ひ手、實盛なら實盛、お園ならお園の遣ひ手として、番附の上に記載されてゐるのは、「主遣ひ」と呼ばれる主任者で、頭と右手の動作を受け持つ。「左り」と呼ばれて左り手だけを遣ふ人が一人、「足遣ひ」といふ兩足の動作を受け持つのが一人。つまり三人遣ひといふことになる。この三人が主遣ひの呼吸に合せ、動作せしめてこそ、統一ある一個の人形として演技するので、これがまたむつかしい。足遣ひだけで十年近くも働らき、それから左りにまはり、やがて主遣ひに進む。

人形淨瑠璃の舞臺——それにも幾變遷があつた慶長以前の傀儡子時代のは、所謂首掛芝居で、一尺巾に二尺か二尺五寸限度の長方形の箱が舞臺であつた。それが次第に擴大されて、明治座の舞臺でも歌舞伎座のでも、何とかして使ふやうになつた。現今の大阪文樂座の舞臺は、間口が六間より少しつまつた程度であるが、それ以前のは三四間から五間くらゐのものであつたらしい。手遣ひ式でない絲操り式のは、もつと規模が小さかつた。

今の舞臺は、見物席寄りに三尺ほどの幅で、使はない部分がある。これが三の手。それから船底とも呼ばれて床の低くなつてゐるところ、歌舞伎の平舞臺に該當する部分が二の手である。二重舞臺に相當して、屋内に用ひられる、最も奥に位した部分は一の手、または本手といふ。元來は本手といふ本舞臺だけであつたのが、次第に擴大されて二の手三の手と見物席の方へ張り延ばしたから



の名稱である。

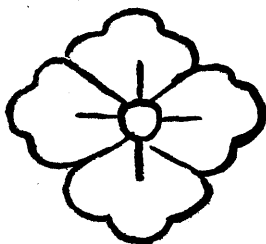
また、太夫と三味線とが、向つて右側へ張り出した床で語り、弾く。即ち横床といふものになつたのも享保年度のこと、義太夫近松頃のは、特別の場合以外は、正面の御簾の内側で語つたのである。人形遣ひも、その頃はからだを現はして使はずに、幕の蔭から人形を差し上げて遣つたもので、「蔭語り蔭遣ひ」と呼ぶ演出形式であつた。

それが次第に「出語り出遣ひ」といふ形式に移行し、結局今日のやうな演出形態になつたのである。それでも、東京興行の場合のやうに、人形遣ひが序幕から切りまで、黒の頭巾をかぶらずに、出遣ひばりといふやうなことは、ごく近年になつての現象です。人形劇として見れば、人形遣ひは頭巾をかぶつてゐるのが本來であること申すまでもありません。

人形芝居といふものは、世界中に分布されてゐます。未開既開の民族を問はず、甚だ廣く、また古く行はれてゐる。けれども、日本のやうに發達したものは、殆ど類例がありません。淨瑠璃といふ音楽は別としても、「假名手本忠臣藏」や「菅原傳授手習鑑」のやうな、大きなスケールの人形劇臺本といふものや、或は三人遣ひの人形で複雑な演出をするが如きものは、嘗てないとされてゐる。

(河竹繁俊氏稿より抜萃)

# 竹本攝津大掾略譜

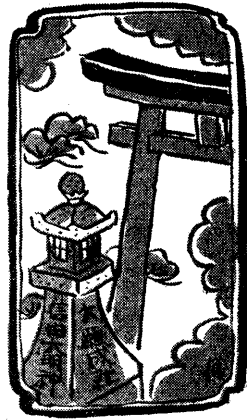


天保七年三月十五日大  
阪順慶町三丁目塗物問屋  
伊勢屋森七三郎の子とし  
て生れ吉太郎と呼んだ。  
母の久が離別の時母方に

養はれ、後釣鐘町の大工二見伊八の養子となり、名を龜  
次郎と改めた。養父伊八は素人淨瑠璃の天狗であつたか  
ら、十一才で三味線を學び、廿才の時に藝人として起つ  
べく決心し、三代野澤吉兵衛の門に入つた。初代竹本越  
路太夫の子であつた吉兵衛は己が相三味線を勤めてゐた  
五代目竹本春太夫を師としてつかしめて南部太夫を名乗  
つた。時に安政五年廿二才の時である。吉兵衛はその後  
萬延元年、南部廿五才の時、所謂道具淨瑠璃として彼を  
伴つて江戸に下り、各所の寄席を打ち乍ら南部を修業せ  
しめ、父越路太夫の名を興へて二代目を名乗らしめた。  
攝津大掾の藝の基礎が出来たのはこの江戸時代であつて  
三代吉兵衛の指導の宜ろしきを得たのであつたが、吉兵

衛は文久二年七月江戸で歿くなつた。(この時、一時住  
太夫を名乗つてゐた。)二代越路はその好き指導者に離  
れ、慶應元年三月からは稻荷文樂軒芝居へ五代春太夫と  
出勤する様になつた。それ以來は師匠春太夫の教を受け  
明治十六年四月終ひに越路は文樂の紋下となることが出  
來た。(三味線團平、人形玉造と共に文樂の三絶とも稱  
へられた。)その翌十七年九月、文樂座は松島から御靈  
の境内へ移轉し、こゝで越路の全盛期が續いた。明治卅  
五年九月十日 小松宮殿下より攝津大掾の名號を賜り、  
次いで同卅六年一月、師匠春太夫の遺言により六代目春  
太夫を襲ぐの素志を果し終へて、改めて同年五月、愈々  
竹本攝津大掾を受領することになつた。(其時の出し物  
は「妹春山」山の段の後室定高)斯くして大正二年四月  
「楠昔噺」徳太夫住家の段を最後に引退し、同六年十月  
九日、高齡八十二才にして歿した。その藝風は上品に美  
聲、呼吸の長い事無類で殊に艶物に長じ、妹春山の四段  
目、先代萩の四段目、中將姫、廿四孝の十種香などが得  
意とされてゐた。

保  
名  
物  
狂  
の  
段



|    |    |    |    |    |    |    |
|----|----|----|----|----|----|----|
| 野鶴 | 野鶴 | 野鶴 | 豊竹 | 竹豊 | 竹竹 | 竹竹 |
| 澤澤 | 澤澤 | 澤澤 | 竹本 | 本竹 | 本本 | 本本 |
| 吉鶴 | 八友 | 吉友 | 呂南 | 播千 | 文源 | 伊南 |
| 太  | 衛  |    | 賀次 | 路駒 | 太太 | 達部 |
| 季郎 | 造門 | 彌  | 太夫 | 太夫 | 太夫 | 太夫 |

あしや  
だう  
満大内鑑  
おほ  
うち  
かざみ

保  
名  
物  
狂  
の  
段  
葛の葉子別の段  
信田森二人奴の段

この曲は信田森の白狐と安倍保名と契つて阿倍晴明を生んだと云ふ有名な信田妻の傳説に基づく劇曲中の代表作と云はれるもので享保十九年十月十五日(二三九四)より竹本座興行。全五段よりなり竹田出雲の單獨作である。尙、この作は延寶六年(二三三八)刊行の山本角太夫の正本「信田妻」、及びその改作で正徳三年(二三七三)豊竹座上演の紀海音作「信田森女占」や、これより以前に歌舞伎でも演じられた作などを總合した上に、更に結構を大がかりにし筋を複雑にし、場面の變化を多くしたもので實に信田妻の集大成とも云へるものである。この大内鑑の後には他流の語物としても種々あるが、清元の「保名」など殊に世に知られてゐる。

尙、この大内鑑の初演の時に始めて與勘平、野干平の人形を三人で遣ひ、これが人形三人遣ひの源流になつた

## 人形役

|      |       |      |        |      |     |     |         |
|------|-------|------|--------|------|-----|-----|---------|
| 阿倍保名 | 葛の葉姫  | 奴與勘平 | 石川悪右衛門 | 狐葛の葉 | 腰元  | 取巻  | 葛の葉子別の段 |
| 吉田玉幸 | 吉田光之助 | 吉田文作 | 桐竹紋太郎  | 吉田榮三 | 大ぜい | 大ぜい |         |

|       |      |       |       |
|-------|------|-------|-------|
| 鶴澤仙三郎 | 鶴澤一郎 | 鶴澤徳之助 | 野澤勝之介 |
|-------|------|-------|-------|

|        |        |        |
|--------|--------|--------|
| 中      | 前      | 後      |
| 豊竹和泉太夫 | 竹本住太夫  | 竹本大隅太夫 |
| 鶴澤叶    | 野澤喜代之助 | 鶴澤清二郎  |

と云はれてゐる。

因みに今度上演される保名物狂の段は全曲の第二段目  
葛の葉子別の段及び信田森二人奴の段はその第四段目に  
當つてゐる。

## 梗概

天文博士賀茂保憲の死後、その秘書を二人の高  
弟蘆屋道満と安倍保名との何れに傳へるかに就て  
争が起つた。然し賀茂家の養女榊の前は保名とは  
戀仲だつたので彼に譲らうと謀つたが秘書は既に  
道満の方に奪はれ、爲めに榊の前は自殺して果て  
る。成行を氣遣つてゐた保名は悲しみの爲めに發  
狂し、形見の小袖を抱きしめて迷ひ出る。――奴  
の與勘平もその跡を追つた。

信田の庄司の娘葛の葉姫は悪夢が氣にかゝるの  
で、姉榊の前の身の上を祈願の爲め信田明神へ參  
詣し、序に幕を打たせて花見の宴を開いてゐた。  
其處へ戀人の小袖を肩にして素袍袴を踏みしだき

人形役割割

|   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 信 | 木 | 阿 | 葛 | 庄 | 信 | 阿 | 狐 |
| 田 | 倍 | の | 司 | 司 | 倍 | 葛 |   |
| 森 | 綿 | 葉 | 奥 | 庄 | 童 | の |   |
| 二 | 買 | 姫 | 方 | 司 | 子 | 葉 |   |
| 奴 |   |   |   |   |   |   |   |
| の |   |   |   |   |   |   |   |
| 段 |   |   |   |   |   |   |   |
|   | 大 | 吉 | 吉 | 桐 | 桐 | 吉 |   |
|   |   | 田 | 田 | 竹 | 竹 | 田 |   |
|   | ぜ | 玉 | 光 | 紋 | 紋 | 榮 |   |
|   | い | 幸 | 助 | 門 | 之 | 三 |   |

|     |     |     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 葛   | 童   | 藤   | 悪   | 與   | 野   |
| の   | 子   | 治   | 右   | 勘   | 干   |
| 葉   |     |     | 衛   | 平   | 平   |
| (竹) | (竹) | (竹) | (竹) | (竹) | (竹) |
| 本   | 本   | 本   | 本   | 本   | 本   |
| 文   | 宮   | 松   | 隅   | 三   | 相   |
| 源   | さ   | 島   | 若   | 瀧   | 生   |
| 太   | 太   | 太   | 太   | 太   | 太   |
| 夫   | 夫   | 夫   | 夫   | 夫   | 夫   |

つつ狂へる保名が迷ひ来る。然し、幕の内から榊の前と瓜二つの葛の葉が出て言葉をかけると忽ち保名は正氣となり、二人の間に早くも戀が新に芽立つた。

葛の葉には兼ねて執心の石川悪右衛門がゐた。その悪右衛門が信田森に白狐狩をした。そして白狐が狩り出されて來たが保名がそれを助けた。

奴與勘平に送られて葛の葉姫は庄司屋敷へ歸へつて行つた。その後へ悪右衛門が再び襲つて來、保名も危くなつた時、さきに助けた白狐が葛の葉の姿で現はれ保名を助ける。そして二人は阿倍野の里に隠れ住むことになつた。然し保名はこの葛の葉が白狐であるとは知らなかつた。

斯うして保名はいつか狐葛の葉と二世を契り、それから六年の歲月が流れ、今では五才になる童子まで儲けた。

久しく音信のない保名の留守宅へ信田の庄司夫



葛の葉姫は改めて保名と夫婦になり、童子を育てる事になる。

其後、葛の葉姫が石川悪右衛門の爲めに危かつた時、奴與勘平の姿そのまゝの野干平が現はれ、二人の働きで姫は救はれた。野干平こそ、奴姿に化けた信田の狐であつた。

### (佐和利) 保名物狂の段

戀よ戀我中空になすな戀、戀風來ては袂にかい纏れ、思ふ中をば吹分る、あら心なの嵐に連てうら吹かへすかたみの小袖、見るに思ひのます故にこそ狂はすれ、狂ふは誰そや我はそも安倍の保名が、安からぬ胸にせまりし數々より何國をさして、和泉路を寄るべの水もうたかたの、たゞよふ姿亂れ髪、素袍袴ふみしだき浮れ步ぞ只ならぬ、これこれ物問はう、もし其邊へ十八九の娘のかいどりづまでしやならゝと行ぬか、ヤアヤアゝ何じやしらん、ヲ、其尋る人こそ、芝蘭芙蓉の花の顔、姿は物か、及びなき、更ゆく鐘別の鳥も一人ぬる夜はよさの泊りはどこが泊りぞ、草を敷寝の肘枕、ひとり明すぞ悲し

けれゝゝ、葉越のゝゝ幕の内昔し戀しきおもかげや、うつりがや、其おもかげに露程も似た人有ば教へてたべ、遠近人に物とはん、ヲ、イゝゝと招けば招く與勘平、心細道分迷ひ行ばあびきの聲さへも梢まばらにうらがれてかげも姿もちらゝと急ぐ心に道はかも行手の森を目當にて漸に走り付、是はゝ正體もなき且那の有様人の見る目も恥ぢ給へ、サアお歸りといさめすかして引く手を拂ひ、かしこにしげる榊の枝に、かたみの小袖、打かけて、アレゝゝアレゝゝ枝にゆかしき人は見へたり、嬉しやとて、よぢ登れば榊の枝は身をとふし愛着は胸をこがすコハそもいかに淺ましやと、詮方涙に伏しづむ、コハ情なき御有様、心なき草木をこがれ賜ふも迷ひのそら目、何、そら目とは事おかしや、心有ばこそ時をたかへザア、アレゝゝアレゝゝア、ソレゝゝそれそこにドレどこに、眞實君に逢たくば信田なる社に歩み運びて七日七夜さ、こもらば御利生、まさしくあらたに、戀しき人にはあひも見もせめ、中にことさら榊の枝に君が小袖を打きて、まがふ方なき榊の前非情とは與勘平ナイゝゝ汝こそ草よ木よと、かたみの小袖身に添へて泣きつ笑ひつ、様々に狂ひ亂るゝばかりなり。





### (佐和利) 葛の葉子別の段

妻は衣服を改めて、しほくくと奥より出で、臥たる童子を抱きあげ乳房をふくめ抱きしめて言はんとすれどせぐりくる涙は聲に先立て暫くむせび入けるが、恥かしや淺間しや年月包みしかひもなくおのれと本性を現はして妻子の縁を是切に別れねばならぬ品になる、父御にかくと言ひたいが、互に顔を合せては身の上語るも面ぶせ、御身寝耳によく覺へ父御にかくと傳てたべ、我は誠は人間ならず、六年以前信田にて惡右衛門に狩出され、死る命を保名殿に助けられ再び花咲蘭菊の千年近き狐ぞや。あまつさへ我故に數ヶ所の疵をうけ賜ひ、生害せんとし賜ひし命の恩を報ぜんと葛の葉姫の姿と變じ疵を介抱、自害をとどめいたはり付添ふ其うちに、結ぶ妹春の愛着心、夫婦のかたらひなせしより夫の大事さ、大切さ愚痴なる畜生三界は人間よりは百倍ぞや、殊におことを儒けしより、右と左に夫と子と抱て寝る夜の陸事も夕べの床を限りぞとしらず野干の通力もいとし可愛にうせけるが今別るゝとて父御前の業でもなく、元より名をかり姿をかりし葛の葉殿、恩は有れども恨みはなし、庄司殿御夫

婦を誠のぢいさま、ばうさま、葛の葉殿を眞實の母と思ふて親しまば、さのみ憎ふも思すまじ、惡あがきをふつつとやめ、手習、學問精出して、這は父の子程ある器用者と譽られよ、何をさせても埒明かぬ道理よ、狐の子じやものゝ人に笑はれそしられて母が名までも呼出すな、常々父御前の、虫けらの命を取るろくな者にはなるまいと只かりそめのおしかりも母が狐の本性を受繼だるか淺間しやと胸に釘針さす如く何ぼう悲しかりつるに、成人の後までも小鳥一つ虫一つ無益の殺生はしすなへ、必ずくく別るゝ共母はそなたのかげ身に添ひ行末長く守るべし、とは言もののふり捨てて、是が何と歸られふ、名殘惜や、いとほしや、エ、離れがたなや、こちよれと、抱上抱付抱しめて思はずわつと泣く聲に、保名一間を走り出、仔細聞たり何ゆへに童子を捨てやるべきと、呼ばる聲に庄司夫婦葛の葉も、轉び出、放ちはやらじと取付けば、抱し童子をはたとすて、形はきへて失にける。

### (佐和利) 信田森二人奴の段

葛の葉立出で此詮議は仕様がある、是こちらの與勘平

與勘平心得たるか、と言ければ扱てもさつぱり申たり、仲間内の尻持とは頼もしい野干平、差圖に任せお供せう、惡右衛門が若鼠あなづつて毘にかゝるな、よそながら一曲と、童子を脊におひ茂る葛の葉隠れ草隠れ忍びて事を窺ひ居る。

そなたはいくつで奉公してどこの生れじや、名は何と言ふ、それ聞ふ、エ、此髭めは丹波の生れ、爺打栗がせつかん強く、十一でお家へ参り、足手かいさまに精出して、たかゞ下郎の精一杯、二合半のもつそふあたま、すりこぼつたは十四の春、一兩二歩の切米に違ひない、お前様もお聞なされてごはりませふ、成程、主の咄しに違ひはない、サア此奴が身分は濟だ、そやつは、またどこから出た、どこから出たとは天から降らず地からも湧ず、木の股からは猶出られずお定りのヤ穴から出た、何だ穴から出た、ヤ穴から出たとは、はれよく出たなシテ切米はいくら取かや、ハテ身が切米は十二文、ひんねじ紙の燈明代本社拜殿玄關前賽錢箱の皮覆、金紋大房隠れあらない、受領神にぶつ仕へ鳥居の馬場先かゞどふしつかとふん付た、二合半の小豆飯色こそかはれ品こそかはれ、其お子生んだ白狐女郎はおらが仲間の寄親殿だ、頼むに引れずぬつと出たはれよく出たな、奴が出生穴かしこ、人に語るな女郎花、桔梗萱萱、われもかう、身は蘭菊に遊べ共咄しの尾花はいつかな出さない、惡右衛門主従は此與勘平に打任せ親子の衆の供をして、連て退たが



日吉丸ひよしまる稚櫻おきなざくら

小牧山城中の段



小牧山城中の段

角太夫改め

人形役

割

切竹本重太夫  
豊澤廣助

|        |       |
|--------|-------|
| 鍛冶屋五郎助 | 桐竹門造  |
| 木下藤吉   | 桐竹紋十郎 |
| 五郎助女房  | 桐竹政龜  |
| 堀尾茂助義晴 | 吉田光之助 |
| 女房お政   | 吉田文五郎 |
| 悴竹松    | 吉田文枝  |
| 永井早太   | 桐竹紋司  |

享和元年（二四六一）十月、大阪北堀江市の側の芝居（座本豊竹時太夫）に上場をみた全五段もので、作者は近松やなぎ、近松加造、近松萬壽、近松梅枝軒。數ある太閤記種の一つで、日吉丸の出生から榎狭間合戦に至る迄を材としたもの。尙、この小牧山城中（駒木山城中）の段は三段目の切に當り、俗に「五郎助住家」とも稱ばれ、全篇のヤマとなつてゐる。因みにこの外題の訓み方に就いては、邦樂年表その他には「ひよしまるわかぎのさくら」とあるが、こゝでは文樂座の慣例に従ひ「ひよしまるおさなぎくら」として置く。

梗概

齋藤明舜の家臣加藤忠左衛門清忠は鍛冶屋五郎助と名乗つて世を忍んでゐた。五郎助にはお政と云ふ娘と竹松と呼ぶ息子があつたが、娘お政は木下藤吉の臣、堀尾茂助吉晴の

妻となつてゐた。

この吉晴はもと源太郎とて茶碗屋源左衛門の義子であつたが、今では小田春長の小牧山城を預る木下藤吉に召抱へられて武士に取り立てられてゐるのである。

偶々舅の五郎助が義理ある親の源左衛門を殺害した事を知つて驚いた吉晴は、義として妻のお政を離別しなければならぬ破目に立到つたので、お政は悲しみの餘り自害してしまつた。

五郎助は娘可愛さから密かに切腹し、苦痛を押し隠して聶の吉晴にそれとなく龍興の居城稻田山の間道を教へた上、娘をその場で勘當してしまつた。お政も母親も悲歎の涙にくれて、父の仕打ちを怨み泣いた。

然し五郎助の本心は、娘を勘當して吉晴の妻としたい苦肉の計であつた。吉晴もそれと察してお政を妻とする事を承諾した。頻死のお政も喜びに咽び泣いた。



折柄木下藤吉が立ち出でた。五郎助は故主龍興の女萬代姫の身代りとして、娘お政の首を打ち落した。萬代姫は春長に嫁したが、此の小牧山城中に押籠同然に暮してゐたのを、春長が今宵藤吉に命じて首を打たせると云ふ事を五郎助が知つたからである。

藤吉もその苦衷を察し涙にくれるのであつた。

斯くして藤吉は五郎助の遺児——お政の弟の竹松を手許に養つて家臣とする——これが後に勇名を轟した加藤正清であつた。

### (佐和利) 小牧山城中の段

立上る裾引とゞめ、マアマア待つて下さんせ、最前からあらましは、櫓の蔭で聞きました、とはいひながら情ない、過ぎし逢ふ夜の睦言を、身にしみくと片時も、思ひ忘るゝ隙もなう、年月隔つ其中に、うつり易きは殿御の心、もしや見捨てはなされぬかと、ほんにあらゆる神様や、佛様迄無理いうて、案じ暮した甲斐もなう、添はれぬ義理の離別とは、あんまり酷いと取付いて、涙先

立つくときごと。

始終開ゐる五郎助は、手負の方へ見向きもせず、夫齋藤龍興が立籠つたる稻田山の城廓は、凡そ東國第一の名城、一夫是を守らば萬卒破りがたき堅固の要害、此城を落すには、瑞龍山の峰づたひ、西に聞ゆる瀧の音を心のあてどに谷へ下り、水に随ひ出づる時は、搦手の水門口敵の油断は此處一つと、聲の堀尾に餘所ながら、知らず間道聞とる吉晴、敵を攻つ味方の英氣、ひらくる武運と心の悦び、母は何の氣も付かず、コレ——五郎助殿氣が違ふたか、そりや何ぞ、娘のお政が此様に、コレ自害して死にました——わいの、オ、男故に命を果す徒女郎、勘當じや親子でないぞ、エ、夫はあんまり胴慾な可愛い娘が命の際、勘當とは何事ぞ、心づよやと伏し沈めば、五郎助は聲を荒らげ、天地の間に、生あるもの、子を憐まぬものがあらうか、まして人間不愍になうて何とせう、可愛さ餘つて縁を切り、聲にしらせし稻田山の間道、イヤサ我子の勘當、堀尾茂助吉晴殿とくと承知あられかしと、夫と知らする五郎助が、恩義を籠めし一言に、胸の底意をあらはせり。

母も思ひに正體なく、氏も系圖も揃ふたる武士の種とは露知らず、宵に尋ねてあふた時、かゝ様わしは仕合せもの、立派な殿御持ちました、今から武士の女房じや、髪結びやう飾まで、幾千代祝ふ丈長も、心祝ひの友白髪、何をどうしてかうして、と楽しんでゐやつたもの、こんな悲しい身になつて、髪もかたちも要るものか、可愛の娘と死首を、顔に當て身にそへて、歎けば父も諸共に聲を限りに泣きつくす、恩愛別れの血の涙、胸に盤石打たると思ひ、こたへかねたる吉晴が、心を察し久吉も、しぼる袂も雨車軸、四人の涙谷川へ、落込む水の逆落し山も崩るゝ如くなり。

## 竹本重太夫の代々

### △初代

泉州堺の生れ、初代春太夫の門に入る、師歿後三代目咲太夫と改名、當時笑ひの名人と云はれる、享和五年三月二日死去。

### △二代目

三代咲太夫の門人、後に四代目染太夫の名跡を繼ぐ、「石屋橋」として名高し、文政六年十一月十七日歿。

### △三代目

二代重太夫の門人、始め三代目中太夫門弟にて琴太夫と云ひ、後重太夫の門に入り三代を繼ぐ、後天保十一年二月、五世竹本政太夫となつたが、その披露興行中發病し、同年六月廿三日歿す。

### △四代目

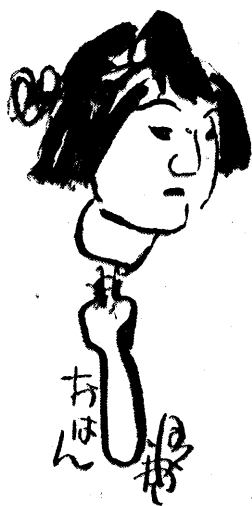
丹波の人、安政年間京都に出て山城掾の門人となり、初め二代目葛太夫と名乗り、後に阿蘇太夫、次いで慶應三年六代目むら太夫を繼ぐ、明治七年四代目をつぎ後、病床にて六代政太夫を相續して明治十九年八月五日死去。

### △五代目

明治四年五月大阪に生れ、十三歳の時小政太夫の門に入る。後十九歳にして二代目起路（攝津大掾）の門に入り竹本角太夫を名乗り、廿一歳より文樂座へ出勤、其後彦六座に轉じ、後又文樂座に入る。昭和二年叶太夫と共に文樂座を退いてゐたが本年六月より叶太夫と相携へて文樂座に戻り今日に及ぶ。

おつま 八郎兵衛 櫻鰐恨鮫鞘

鰐谷の段



鰐谷の段

中竹本織太夫

竹澤團六

切豊竹古鞆太夫

鶴澤清六

この淨瑠璃は安永二年十一月（二四三三）豊竹座初演で（作者不明）、明和六年二月（二四二九）竹本座上演の八民平七作「裾重浪花八文字」の改作である。お妻八郎兵衛の實説には大阪と江戸と兩方にあり、大阪では元祿三年戌（二三五〇）の嵐三右衛門の唄に「涙の時雨、古手屋の仇と情をときわけの薄き契や八郎兵衛が、妬の劍研ぎたてゝ吾と身をさく鰐谷」とあり、また江戸には明和頃、かくし賣女銀猫のおつまと、立花町の呉服屋八郎兵衛との情話があるが、何れにしても事實は不明である。歌舞伎でも「鐘もろとも恨鮫鞘」となつて現存して居る。

梗概

古手屋八郎兵衛は丹波屋のお妻と馴染を重ね、今ではお半と云ふ子まで出来てゐた。

八郎兵衛は今こそ町人となつてゐるが以前は立



## 人形役割

|         |       |
|---------|-------|
| 古手屋八郎兵衛 | 吉田榮三  |
| 女房お妻    | 吉田文五郎 |
| 仲仕銀八    | 吉田玉藏  |
| 母親おくま   | 吉田小兵吉 |
| 香具屋彌兵衛  | 吉田玉幸  |
| 娘おはん    | 桐竹紋司  |
| 天保の十兵衛  | 吉田玉徳  |
| 取巻      | 大ぜい   |

派な武士で、舊主伊織が寶刀を紛失してしまつたのを我が身に引き受けて詮議に心を盡し身を碎き其寶刀を手に入れる金策に毎日夜家を外にして奔走し居るのであつた。

夫の苦心を察した女房お妻は、秘に母親おくまと計つて、兼ねて自分に心を寄せてゐた香具屋彌兵衛と金五十兩也の持參金を條件に、天保の十兵衛を仲人にして、心ならずも祝言をして身を任せてしまつた。

外から立戻つた八郎兵衛は斯うした女房お妻や姑のおくまの本心も知らぬことゝて、二人から散々に悪口を並べ立てられ、その上愛想づかしを言はれてはもう我慢がならなかつた。然し娘おはんの事を考へてはじつと辛棒をするのだつた。

お妻は斯うまでしても夫に忠義を立てさせ様と血の涙を噛みしめてゐた。

併し我が子おはんを夜寒の外へつき出して憎い彌兵衛と奥に添臥してゐるお妻や、その手引きま

です。姑おくまの仕打ちにはもう勘辯がならなかつた。矢庭に内へ飛び込むと同時に恨の鯨鞘の一刃で姑を斬り、返へす刀でお妻まで殺してしまつた。この様子に驚いた彌兵衛は逃げ去つた。八郎兵衛はその場で自害しようとした。

その時、意外にも娘おはんの口から「書置の」と覺束かない口づてに、おつま親子の本心が語られた。

然し遅かつた。おつま親子の本心を知つて如何に歎いても再び生き返へる筈もない。

折柄、彌兵衛の訴へで捕手が八郎兵衛を捕へに押し寄せる。併し其時、來合せた義侠の友人銀八は、自刃しようとするのを押し留め、跡を引受け、一先づ八郎兵衛を四ツ橋方面へ落してやる。

### (床本) 鰻谷の段(切)

隣座敷に彈出す、浮世を流す堀江川、流れに淀む捨小船、繫がぬ縁は是非もなや、戀路の鬼か丹波屋の、妻に通ひしかね言も、昨日と今日の飛鳥川、歌も古手屋八郎

兵衛、結合ふたる惡縁の、契も深き長堀の、つい一筋が鰻谷、我家の軒も我乍ら、外を家なる八郎兵衛暖拂して内にいり、ホ何と思ふてやら、今日はさつぱり身仕舞が出来たの、父様、夕べから待つてばかりゐたわいの、オ、然うである、吾身がてつきり待つてゐやうと思ふて、道で買ふたうづら焼、マア一ツ食うて見よと、甘き土産も親の恩、コレ母様、父様に土産貰うた、お前も一ツ遣るかへと、いへど答へも、コレおつま、マよう來たともいひもせず、俯向いて斗りゐるは、エ、聞えた、此中から頼んでおいた、金の工面が出来惡ふてか、イヤコレ是だんないぞや、吾身の手で出來ずば、又外に工面もあらう、女夫の仲に何の遠慮する事があるぞいの、イエそんな事ぢやないわいな、ムウ其でなくば、マ何じやろ、エ、扱は例の親子喧嘩じやの、アノ婆様の氣を知つてゐて、せり合ふといふやうな、マ不調法なことがあるものか、ヨイ、俺が中を直して遣らう、イヤ其挨拶は聞きませぬと、立出づる母が顔、コレ母者人、ソリヤ又お前どうした事、お妻に悪い事があれば、詫言するが男の役、イヤこれ、娘には何にも過りは御座らぬ、

此処曲豆竹古

大太夫  
柳勤申作



三  
花

氣に入らぬと云ふは、此方の事、も此方の内へふつゝりと、足踏して下さんな、お妻と縁は切りましたぞ、ム、夫が女房に暇を遣るは世間の大法、其に引換、女房の方から、縁切ると云ふ此方の思案は、アイ聲を取りましたオ、慮外乍娘には、歴とした男がござる、うかゝと長居はなるまい、サ、早う去んで貰ひましょと、聞て八郎兵衛膝立直し、屋敷奉行の其内から、得心づくで貰うたお妻、元より子までなしたる夫婦、今御主人の御難儀故人の目立つを如何と思ひ、わざと此家を遠ざけし、此八郎兵衛に暇もとらず、聲を入れては濟むまい、イヤこれ、いはしやんすな、いわしやんないの、爰の家はコリヤ俺が家、此方は外に家があれば、表向の男じやない、サ其じやに依つて此方から、隙遣つてとつた聲、ムウシテ其聲はどこに居る、オ、其聲は爰にゐるわい、見知つて置いて貰はうと、親子が中大跌座、ム、スリヤ此方が此家の聲殿か、オ、香具屋の彌兵衛様と云ふて、大金持の旦那殿、へ、慮外乍ら今日からお妻が正眞擬ひなしの花聲様じや、ム、スリヤアノ貴様が香具屋の彌兵衛殿、名は豫て聞いたれど、顔見合はすは今が初

め、エ、そりや互じやい、コリヤ八郎兵衛、素寒貧のわれを逐出し聲になるのも異なものなれど、親子が強つてと云はれるに依つて、氣の毒乍ら、フ、ン我等が女房じやハ、ハ、此餓鬼も男の小忤なら、われと一緒に放りだせど、女らの餓鬼ゆゑこらへてこますは、したがわれが産した子じやと思へば、嘘にも可愛ことはモみぢんもなはいはひ、女らの餓鬼は父親に似ると、我によふ似て小ませたしやツつら、エ、其ちへ失せいと踏ちらせば、八郎兵衛たまりかね、コリヤお妻、畜生めらに物は云はぬ、是程の事仕出すからは、我が知らぬと云ふことはあるまい、譯を聞かねば金輪際、隙やらぬが男の意地、包まずいへ、と、せちがふ夫、皆尤と思へども見合す母の顔形、見目潤ほす涙をば、隠して態と笑ひ顔、ヲホ、コリヤ可笑いはひな、何ぼうお前が其様に云はんしても、母様には換られぬ、くどくど云はずと早ふ去んで下さんせいなア、スリヤ己も得心の上、彌兵衛と夫婦になるのじやな、お妻我れ夫れでは立つまいがな、ハテモ立つも立たぬも金次第じやはいな、オ、娘出来したよう云ふた、アハ、よう云ふた、アハ、よふいやつた

なふ、ホ、／＼コリヤ八郎兵衛我身にかゝつて此間からお妻一人が何やらむしやくしや、譯を聞けば金の入る筋女房の方から入れたしゝて、男に持つてゐやうより敷金貰ふ舞殿を、入る方がマ當世々々、夫がいやなら今爰へざつと手土産二十兩、彌兵衛殿から貰ふた程、工面して持つて来い、よもや返事なるまいかと、慾に引つばる熊手性、オ、金に目がくれ夫婦の義理も思はぬからは、一言も二言もないはひ、けんどん邪見な己等に、可愛おはんは渡されぬ、サ娘よ来いと手を引いて行かんとすれど、しく／＼と、父様、どつこへも去て下さんな、わるいことがあるならば、餘所の伯父様に託言して、かゝ様と一緒に、爰の内にゐて下され、拜みまする父様と、縋る我子を抱きしめ、子心にさへ其やうに思ふもの、己や何とも思ひをるまい、犬と云はふか、猫と云はふか、譬へん方なき人外めと掴みかゝるを彌兵衛おし留め、コリヤヤイ／＼何しあがるのじや、エ、何んしやがんのじやい、コリヤ今迄とは違ふぞよ、親が赦した俺が女房じやヲ、おれが女房じや、指でもさゝば頬かぶりかくぞよと非道ながらも理の當然、引裂くやうに思へども、主人の

大事に引かれて、取つ置いつの一思案、我子を見やる目の中は一つにどみる此場のしぎ、詞なく／＼立歸る、奥よりてんぼの十兵衛、ア、いかいごぞうさ、目の覺め口に何やらむしやくしや、マアざつと濟んでお目出度い、ハ、ハ、御馳走酒のはつたりと、忘れてゐた内の用、仲人はよい加減、ばさまさらばと云捨て、出行く門と奥の間へ、母は彌兵衛を伴ひ入る、跡打みやり女房が、心に泣けど目に泣かぬ、お半を傍に引き寄せて、コレお半、此間から云ひ聞かして置いた事、よう覺えていやるかやアイ皆よう覺えてゐまする、オ、賢い子じや、コレ此母が今云ふ事、よう聞や、やんがて吾身も成人して、どうで一度は嫁入りずる身、たとへ母が居ぬとても、二度の殿御を持やんなや、アイ其もよう合點してゐまするが、コレ母様お前は何として泣かしやる、氣あいでも悪いのなら、藥買ふて來うかへと、俱にしほるゝ我子の眞身、オ、よういふてたもつた／＼よのふ、コレ母はどつこも悪うはなけれ共の祖母様が飯でも炊いてか、夫で畑たうて目が明れぬ、目があかれぬと涙にむせび泣き居たる、徒髪に留伽羅の淺き香りや香具屋の、花となりしと聞くよりも

エ、時も時と、アノ歌わいの、丁度吾身に引當てゝ世に  
諒はるゝもアノ通り、八郎兵衛殿嘸腹が立とうけれど、  
これ勘忍して下さんせゝ、エ何にも知らぬこのお半、  
一年々々立につけ、とゝさんに生寫し、必ずゝ出世し  
て、此母がとひ弔ひ、コレかゝさま、そんならお前は、  
まう死なしやるか、わしも死にたい死にたいと、取付き  
く吾子の顔、二目とも見もやらず、オ、よいやつた歎  
ゝ、よふいふてたもつたのふ、親なればこそ、子なれ  
ばこそ、六つや七つの子心にも、親を大事と思へばこそ、  
誰が其様に親切にいふてくれうぞいの、年頃日頃信心す  
る、天神様の御利生にも叶はぬことか情なや、赦して下  
され八郎兵衛殿、堪忍してくれ吾子やと抱しめゝ脊撫  
すり親と子が涙の限り泣き盡す、心の内こそいでさぢら  
しゝ、かゝる歎きを露知らず、待ちに待ちたる、香具屋  
彌兵衛、やコレお妻、我身はそこに何してゐやるぞいの、  
盃やらこしらへやら、婆様一人が打つたり舞ふたりイヤ  
モいかう俺も急が來た、サアゝおぢや、モ分て戀しいそ  
もじの事、モ顔見ていてはこたへられるもんじやないわ  
い、ハゝゝ、其うつくしい心の底解いて貰はにやおぢ付

かぬ、サアゝ早ふ來てたもいの、サア行くわいな、こ  
れ母様、わしも眠たい行て寝やう、エ、何かに付けてじ  
やまな餓鬼じやなア、これお妻吾身はそいつが可愛い  
アイいいえ、ムウそうであるゝ、坊主が憎けりや袈裟  
までと、おれやモウ何じや知らぬがめつたやたらに憎て  
らしい、ドドおれ次第にしておきや、こりや門に遊んで  
けつかれと、外へ突出し戸をびつしやり、追がの母も胴  
慾といはれぬ辛さ知らぬ子が、これ母様わし一人寝るわ  
いのう、おじさん明けてと叩く戸の、譯も隔ても泣く涙  
サア構はずと女房共とせり立てらるゝ身の辛さ、否とも  
いふにいわけなき、吾子を捨てゝ奥の方、伴ひ入や入相  
の鐘諸共に忍び出秋風寒く身にしむも今の恨は長堀の人  
目を包むほふかぶり、ア、世には似た事もあるといふが  
アノ歌の唱歌を聞に我身の上に、一ツも違はぬ七人の子  
はなす共、女に肌を赦すなと聞いてはゐれど、彼奴ばかり  
はあゝした、不心底があらうとは、微塵いさゝか思は  
ね共、親の慾氣に引かされて、此八郎兵衛を見替たか、  
但又此中頼んだ金の工面拵へる當もなく、なければ夫の  
難儀と思ひわざと女夫と見せかけて、やつぱり金の才覺

も、夫とは云はず心の謎、何にもせよ荒立ては此身の妨主人へ不忠、虫をさすつてよそながらためして見んと門の口、ヤアそこに居るはお半じやないか、父様か、オウ、此闇いのに我れ一人、アノ噂めはどこぞへ行きをつたか、イイヤ母様は奥に居てぢやわいなあ。ヨウ何と云ふ、スリヤあの我を外へ放り出し、彌兵衛と奥にて、ム、チエ可愛いそちを構はぬからは、男の義理も心底も、眞實捨てたコリヤ違ひないはい、エ、そうとは知らないで、おれが手にいろ、道理をつけて見て、よもやと思ふた八郎兵衛が、堪々たがまう叶はぬ、憎さも憎し、うぬ眞二ツに、ヤアきり、な切殺し浮世の夢や鮫鞘の鯉口くつろげ落ざし、ア、イヤ、畜生めらを切殺し吾命を取られたときは、刀の詮議も、親の敵も得討たぬのみか、伊織様のお頼みなされた五十兩、忠兵衛殿へ戻さねば、盡したことも水の泡、ハテどうがなと立つあつ憎さいや増す無念の涙、エ、現在女房を人に取られ、附甲斐なしと一生後指さゝれんも口惜と、駈出して立戻りマア伊織様に此様子と、行かんとせしがふりかへり、思へば憎しと又跡へ、内を覗いつ門を見つ、立つたり居た

り身をもがき、千々に碎くる父親に、附添まはる子もろ、父様ねぶたい寝さしてと、せがみ立られ、オ、道理じや、可愛いやなア親故我れも苦勞する、コリヤ堪へて呉れとばかりにて、子故の闇の憂思ひ、思ひ重る奥の間に三國一ぢや婿に成済ましたしやん、しやんと納まる内祝ひ、エ、是迄なりと八郎兵衛、門の戸蹴放し駈入れば、音に驚き母親が、ヤ、八郎兵衛かといふ間もなく、肩先さがりに切付くる、これ、待つてと女房が、留め隔つる片腕、落て効なき息づかひ、娘は其儘父親が振上ぐる手にぶら下り、父様去んで下されのう、お前が此所に居やしやると、かゝ様が死なしやる堪忍してと云ふ聲が、母の耳にや通じけん、お半はどこにぞ、必ず必ず怪我すなへと、いふが此世の暇乞、一間の障子さつと明け、八郎兵衛は親殺し、此通り注進と裏道さして駈行く彌兵衛、ぼつ付いて一討と、思へど引かるゝ後髪、爰ぞ命の置所と、刀逆手に取直し、コレ父様死んで下さんないのと、取付く吾子を又抱きとり、堪へ兼たる溜涙、袖や袂に淵なせり、斯とは知らず銀八が、とつば川筋一文字、提灯さげてつゝと入り、八郎兵衛

内に居やるかと、上る足元親子の死骸、惻り見合す覺悟の刀、コリヤさせぬはと押止め、マ合點の行ぬ此場の仕誼、様子があらふ仔細はどふじや、どうぢややい、オ、銀八、仔細と云ふたら八郎兵衛が、どうも男が立たぬに依つて、二人ながら打殺し、腹切つて死ぬるが高、コレお半めが事を銀八頼むと、又取直す刀の柄、しつかと押へてもうよいゝは、ムコリヤア八郎兵衛さう云ふ女房に掛り合せ、尤もとは思へども、刀の行方も知れず、今此中で腹切つては、主人へ忠義が立つまいぞよ、サアそこに氣の付かぬおれではなけれど、不義の相手は香具屋彌兵衛といふ奴、残らず見届け只だ今、訴人にうせた天の網、かゝらぬ先に腹切覺悟、サア其網の罹らぬ先き、爰を立退き伊織殿のお行方を尋ねばわりや濟むまいがなム、尋ねるとはソリヤ何で、オ、わけを知らねば合點が行くまい、意地惡の團兵衛めが梅川を請出すと聞き、二人連れで曲輪を驅落ち、その譯知つた仲居のお才、おれに逢ふていふことにや、コレ銀八さん、八郎兵衛様が頼まれてござる五十兩の金、采女様のお情にて其事は納つたれど、梅川殿の身請の金、又も手づめの難儀となり、

命づくに及ぶに依つて、お二人とも落しましたと聞くと其儘逢に來た、こりや此場の仕誼は此銀八が身に引受けへイ人殺しは私でござり舛とこつちから名乗つて出て、意趣切にすりや此場は濟む、氣遣せずと早う行けゝ、エ、早ふ行やい、其事をマア半時先に知つたらば、たとへ人に笑はれても、お主ゆゑと了簡定め、仕様模様もあらうのに、今更返らぬ主君の身の上、不忠に不忠を重ねしも、憎い女が魂ゆゑ、見るも中々腹立ちと、持つたる拔身でめつた突、見る目悲しき娘のお半、とゞ様待つて晝置の事、アレ伯父さん留て晝置の事、ヨウ何じや晝置じやアイ晝置の事、一ツ何から申し残そうやら、案じに暮れて言ひ残しまゐらせ候、と云ふに不思議と兩人が、ム、さうして其跡は、何と云ふて置いた、サ、ちやつと云へゝよ、アイただ氣にかゝるはお主様、段々積る難儀の上、金の入る譯聞ながら拵へるあだてもなく、親母様といひ合せ、夫の爲に此身を汚し、まゐらせそと聞いて驚く銀八が、オ、そうあらうゝ、コリヤさう有りそふな事ぢや、ム、ゝ、わりやマア賢い者じや、よう覺えてゐるなサ、ゝ、其跡をちやつといへゝよ、アイ夫れもいとい



は致さねど、是迄ついに愛想盡かし聞かさぬお前に、愛想を盡かし、譯を云ふたら留らるゝは知れた事、それではやつぱりお主へ不忠、アノこの後はどうやらじやあつた、ムウ忘れたか、ア、だんない、忘れたら又思ひ出していへヨ、ヨ、コリヤお半ふいへ、エ、きり、ぬかさんかい、コリヤ八郎兵衛何するぞい、ちいさい者を可愛そふに、よふ覺へていたと誓てはやらいでびしや、と、虫でも出したらどふするぞい、ア、とゝがたゝきおつたか、ム、だんない、とゝはの半分氣違ひのよふに成つて居るによつてな、とゝには又此伯父が大きなあつゝをすへてやるは、ノウ泣事はあらせん、思ひ出して其次をちやつといへヨ、ア、年はも行かぬにわリヤマアいかい苦勞をするなア、サア思ひ出したわヨ、ヲ、思ひ出した、サ、ちやつと云へエ、ヨ、アイ、其譯も得云はず、是許りが未來の迷ひ、云置たい事あれば、年端もゆかぬ者のこと、娘お半にあらかた言ひ殘し候、いひたい事も得云はぬ、無筆は何んの因果ぞやコレお伯父様こゝいふ時かゝさんが泣いてじやつた、是に付でもたゞ可愛いはエ、イヤアノ娘のお半、精出して

寺へもやり物も縫はせ大事に育て頼入候、不惑と思し一遍の御回向頼むとゝ様と聞いて八郎兵衛正體なく、エ、聞こえぬぞよ女房やい、さう云ふ事ならツヒ一言、明して云はば此やうなむごいめはさせぬはいやい、たとへ顔が立ぬといふても、お主ゆゑなら何の留うぞ、今思へば姑が憎う云ふたも裏の裏、お妻が代りに母者人、こなた一人殺される心であつたか、あつたかいのふ、エ、そふ共知らずむごたらしう一刀に手にかけては慈悲が返つて我身の仇、親殺しと口の端にいはる此身はいとわねど、理非もたゞさず二人共切つて捨ては何事ぞや、赦して下され母者人、堪へて呉れよ女房と、空しき死骸に取付いて悔み歎けば銀八も、オ、道理じや、と諸共に、胸一杯につつかゝる、身も世もあらぬ雪氷、肝に貫く八郎兵衛が、涙の時雨古手屋の、昔も今も哀れなり、銀八はつと心付き、訴人したれば捕へに來るには定のもの、こゝ構はずと主君の行方、せめて親子の亡骸に、未來の引導、彌陀頼む、急いで用意と押入の、襖明くれば仕込の佛間怪しや内に骨桶の二つありしも覺悟の用意、哀れいやすばかりなり、銀八立寄り骨桶を、手に取り上げればず

つしりと、重いはいかにと蓋取れば、金子の包みに又恟り、オ、これこそ彌兵衛が土産の敷金、エ、此金故に二人共、惜しや命を果せしも、金が敵のうき世の中、せめて主人のお役には、包みほだけの其中に、ヤア此一通は開き見て、ム、コリヤ彌兵衛めが、まさかの時、金取戻すたくみの一札、エ、憎し〜と打ながめ、よく〜見れば見知りある、此一札と懷中より、取出す手帳に引合はし、コレ銀八、此帳面と此一札、ム、問ふまでもない同筆々々、エ、忝ない、スリヤ香具屋彌兵衛めは、當春屋敷へうせたる盜賊、其時拾ひし此手帳、不斷放さぬ今この時、刀の詮議はあの彌兵衛、引捕て詮議せば、親の敵も知るは必定、コリヤお妻喜べわれが忠義は立つたぞよ魂去らずば、よう聞いて迷てばし呉れるなど、眞實こぼす一しづく、手向けの水と成りぬらん、訴人に依つてあまたの人音、先々此方へと銀八も、隠るゝ間も荒醜共、人殺しの八郎兵衛、縛れ括れと聲々に、居らぬは必定裏道へ滅多むしように飛んでゆく。遣り過して八郎兵衛、銀八頼むと出る門口、内と外とに隠れし組子、どつこいやらぬと取付くを、引つかついで兩人が、眞逆様に井戸の中、心そぞろに鳴る鐘は、四ツ橋さして逃れ行く。

## 文樂座小史（昭和十六年調査）

○竹本座創立（現今ヨリ二百五十七年以前）  
貞享元年二月（道頓堀西ノ芝居）

○文樂座發祥（現今ヨリ約百五十年以前）  
天明年間淡路ヨリ植村文樂軒大阪へ來ル

○第一次稻荷社内時代

文化八年ヨリ天保十三年ニ至ル

○西横堀新築地演時代

天保十四年ヨリ安政三年ニ至ル

○第二次稻荷社内時代

安政三年ヨリ明治四年ニ至ル

○松島千代崎橋時代

明治五年ヨリ明治十七年ニ至ル

○御靈神社内時代

明治十七年ヨリ明治四十二年ニ至ル

○松竹合名社繼承

明治四十二年三月植村家ヨリ繼承

○御靈文樂座焼失

大正十五年十一月二十九日

○隨時興行時代

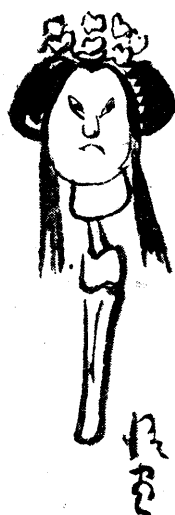
昭和元年ヨリ昭和四年マデ道頓堀辨天座ヲ始め  
其他隨時興行

○四ツ橋文樂座創立

昭和四年十二月以來現在ニ至ル

鷗山古跡松

中將姫雪責の段



中將姫雪責の段

前(豊)竹本相生太夫

豊澤仙糸

叶太夫改め

切竹本春太夫

鶴澤寛治郎

胡弓野澤吉藏

梗概

中將姫の當麻寺縁起物として、謡曲に古く「雲雀山」の曲が行はれてゐるが、淨曲でも元祿九年四月(二三五六)竹本座上演の「當麻中將姫」(作者不詳)があり、その改作が並木宗輔の「鷗山姫捨松」(元文五年二月||二四〇〇||豊竹座上演)で、その中最も名高いのがこの三段目の切雪責の段で、のち寛政九年二月(二四五七)道頓堀東の芝居で「中將姫古跡松」の外題でその三段目を出した事もあり、今日まで外題は一定してゐない。

横佩右大臣豊成の後妻岩根御前は至つて腹黒い人物だつた。岩根は大貳藤原廣嗣など、通じ、政治をめぐる陰謀に加擔して居た。

豊成の息女中將姫は親思ひの發明な娘だつたけれど、繼母岩根は何かにつけて中將姫が邪魔で、

人 形 役 割

|     |     |    |     |
|-----|-----|----|-----|
| 右大臣 | 豊成公 | 吉田 | 榮三  |
| 岩根  | 御前  | 吉田 | 小兵吉 |
| 中將  | 姫   | 桐竹 | 紋十郎 |
| 大貳  | 廣嗣  | 吉田 | 玉徳  |
| 桐の  | 谷   | 吉田 | 文作  |
| 浮舟  |     | 吉田 | 榮三郎 |
| 奴角  | 内   | 吉田 | 兵次  |
| 奴宅  | 内   | 吉田 | 多三郎 |

事々に邪慳に振舞ふのだつた。そして下部林平とのあらぬ不義の濡衣を着せ姫を責めさいなんだ。それに夫豊成の秘藏の御物觀音の像を盗まうとして姫に見られ、これが腹立たしくてならなかつた。岩根は一策を案じ出し、姫にこの觀音像を預け置いた。そして腹心のものに姫の油斷に乗じてこれを盗ませ、紛失の罪を姫に塗り付けやうと企んだのである。

それは雪の降る日だつた。大貳廣嗣は、豊成の館に觀音像を早く差出せと催促に來たのだつた。廣嗣は勿論岩根のからくりを知つて居た。どうやら奸計が豊成に勘づかれたらしくもあり、この上は中將姫を亡きものにするのが岩根たちには得策だつた。

七日七夜の責め苦に面やつれた中將姫は雪の庭前に引き出された。廣嗣は言葉も荒々しく姫を責めたけれど、佛像紛失について白狀する何物もなかつた。



心ない下部どもは手に手に割り竹をもつて雪にこぼる姫を打つた。その時、枝折戸の外へ駆けつけて来たのは侍女桐ノ谷だつた。桐ノ谷はかねてから岩根の邪な仕打ちを悪む姫の同情者の一人だつたのだ。

桐ノ谷はこの場へ入つて、却つて姫を助ける邪魔になつては、とひとり氣を揉むのだつたが、又も降りしきる大雪に姫の痛々しげな様子にたまり兼ね、自分の着て居る上着の一重をぬいで、切戸の中へ投げ入れた。

岩根はこれを見るより猶ほ苛だつて、自ら姫の髻をつかんで捻伏せ引き廻した。桐ノ谷はもう我慢が出来なかつた。枝折戸を破つて内へ駆け入つてこれを止めやうとした。此處へ奥から出て来たのは侍女浮舟だつた。浮舟は前々から岩根に肩を持つと見せかけて居て、實は姫の力になつて居たのだ。岩根に代つて姫を打つと、姫はそのまま悶絶してしまつた。

これを見た廣嗣も岩根も流石に驚いて、そしらぬ顔をして立つて行つてしまつた。

あとに浮舟は姫を抱き起すと、姫は眼を開いたそれは浮舟の教への通り、死んだと見せて居たのだつた。

人の來ぬ中と、立ち上る折しも、待て暫し、と聲を掛けたのは父豊成公だつた。

豊成は姫を此處に置いては爲にならないことを悟つた。そしてあくまでも姫を死骸として口をきくのだつた。

豊成は今日の岩根の仕打ちも知つて居た。しかし、この場合上御一人の御安泰を計るためには、岩根に頼み込んで置かなければならなかつたのだそれを思ひ、責め苛まれる我が子を、見殺しにする心の中の苦しさ、君のため、親のため、よくも艱難して呉れた、と姫に血の涙を絞つたのであつた。

姫は桐ノ谷、浮舟兩人に伴はれて、雲雀山へと

難をのがれて行くのだつた。

### (佐和利) 中將姫雪責の段

あら痛はしの中將姫、七日七夜は泣き明し、明る八日の朝の雪、我を責苦の種となり、身も冷へかへる其上に素足に雪の氷道、劍を踏むが如くにて、淀めばゆけと打ちたたき、梢の雪が一積り、背打かゝれば挫と伏し、起れば叩く割竹に、手足も痺れ、身も縮み、命も息も絶えゝにて、赦させ給へ母様と、聲も惜しまず泣き給ふ。

やれ心なの下部やな、昨日までも今日までも、勞れ傳く身なりしに、淺ましや今日は又、我を責る悲しやと、大地に挫と打伏して、絶入り消入る御有様、餘所の見る目も哀れなり。次第に雪は降り積り、打つ割竹で身内は切れ、肩背に積る雪水が、五體に流れ浸み渡り、五藏六腑が一時に、凍ゆる辛さは斷末魔、彼處に倒れ爰に伏し赦してたべ人々のう、死る末期に一遍の、御經讀誦はさしてくれ、是が此世の願ひぞや、是なうと手を合せ託ち給へば心なき、下部も割竹投げ捨てて袂を絞るばかりなる

ヲ、能う艱難をしてくれたなア、親は隠れて血の涙、浮舟、桐の谷頼むぞや、雲雀山へ死骸を連れ行き、宜きに葬り藏してくれ、せめては野邊の見送りと、涙と共に立給へば、姫は悲しさ物陰より、父の御恩の有難さ、今一度お顔をと出給ふを、二人が止め押隔て、隠せば追が豊成卿も、延び上りく、涙咽ぶ御聲にて、身軀芭蕉の葉の如し、必ず風に破られな、時人を持たざれば、何か先立何か残らん、逢ふが別れぞ去らば去らば、お去らばと、歎きに沈む御姿、見るに悲しさ彌増り、西方彌陀の御國にて、待奉る父上様と、伏拜みく、死を急いだる別れ路は、娑婆即寂光爰冥途と勇める人も後や先、何れ遁れず遁れても、後は消行く雪道や、胸は氷と鳴川の、御館離れ雲雀山、茨の里へと急ぎ行々。

## 竹本春太夫の代々

### △初代

泉州堺の産、大和掾が内匠太夫の頃その門に入り春太夫の名を擧げる。天明四年三月歿。

### △二代目

初め律太夫と名乗り初代春太夫の門人咲太夫の門にあ

つたが中頃より初代春太夫の門に入る。

### △三代目

初代豊竹岡太夫の門人にして町太夫を名乗る。後三代目を繼ぐ。

### △四代目

泉州堺の人。三代目の門人なり。

### △五代目

初代以來の名人、泉州堺の人。廿一才の時、風呂屋の三助をし乍ら竹本氏太夫に就て學び、後さの太夫と改め藝人となる。後師と共に江戸に下り此間に文字太夫と改名。後天保十三年四代目春太夫の養子となり、同年十一月五代目を襲名。後文樂座へ出勤して明治十年七月廿五日歿す。

### △六代目（攝津大掾）

天保七年三月十五日大阪に生れる。五代目春太夫の門人、始め竹本南部太夫、後二代目越路太夫、明治卅六年一月六代目春太夫を襲名。後に小松宮殿下より竹本攝津大掾を賜る。大正六年十月九日八十二才にて死去。

### △七代目

明治六年三月讃岐丸龜に生れ、十四才の時二世鶴澤叶の弟子となり三絃を志して叶吉を名乗る。十五才から文樂座に出勤し、廿才の時太夫に轉じ二代目越路太夫（攝津大掾）の弟子となり竹本叶太夫と改名。爾來文樂座に直屬してゐた。昭和二年より一時舞臺を退いてゐたが、本年六月再び舞臺に上り今日に及ぶ。

阿古屋琴責の段



阿古屋琴責の段

阿古屋 竹本 南部太夫  
伊達太夫

重忠 竹本 七五三太夫

岩永 竹本 長尾太夫  
伊勢太夫

榛澤 竹本 司太夫  
叶美太夫

鶴澤 綱造

鶴澤 重造

ツレ 野澤 吉左

琴・胡弓 鶴澤 綱延

壇の浦兜軍記

阿古屋琴責の段

享保十七年（二三九二）九月九日竹本座初演。作者は文耕堂、長谷川千四の合作。大近松の「出世景清」の改作で、全五段の中、この第三段目の口阿古屋琴責の段が最も有名である。

梗概

平家の侍大將悪七兵衛景清が屋島壇の浦の戦ひより行方知れず、種々詮議に手を盡した末、秩父庄司重忠、岩永左衛門は、榛澤六郎に命じ、景清と云ひ交はした遊君阿古屋を白洲に召し寄せ、景清の行方を尋ねる。阿古屋は今も途中で榛澤様が景清の居所を知つてゐるなら白狀せよと仰せられたが、知らぬ此身は幾度御問ひなされても、お答へは只一つと悪びれもしない。岩永は氣をいらち申し付けた責道具を持てと命ずると、奴共は手に



人形役割

|        |       |
|--------|-------|
| 阿古屋    | 桐竹紋十郎 |
| 秩父庄司重忠 | 桐竹政龜  |
| 岩永左衛門尉 | 吉田玉市  |
| 榛澤六郎   | 吉田榮三郎 |
| 水 奴    | 吉田玉米  |
| 水 奴    | 桐竹門次  |
| 水 奴    | 吉田兵二郎 |
| 水 奴    | 吉田多三郎 |

く手桶、階子、さい槌、棒などを持つて来る。重忠はこれを押止め、女一人に白狀さすに仰々しい責道具は無用と、申し附けた琴、三味線、胡弓を取り寄せる。岩永は不興氣に責道具とは此樂器の類ひ、こりや詮議に事寄せて慰みせらるゝかと詰りかゝるが、重忠は唐土の故事を引いてこれをなだめ、阿古屋に三曲を演奏させる。

糸竹の調は整然として一糸も亂れぬ。重忠はその音色によつて實際景清の居所を知らぬ事を知り岩永の不承知を退けて、阿古屋を己が屋敷へ伴ひ歸へる。

(佐和利) 阿古屋琴責の段

かげと言も月のゑん、清しといふも月のゑん、かげきよき名のみにてうつせど袖にやどらず、重忠耳をそばだて賜ひ、今彈ぜしは落組の唱歌を我身の上に取り、景清が行衛しらぬとな、まあ知らずんばしらぬにせよ、して景清と其方が馴初しはいつの頃、いかなる事の縁により深い契りの年とはなりしぞ、是はまた思ひもよらぬかは



つた事のお尋ね、何事も昔となるはづかしい物語、平家の御代と時めく春、馴にし人は山鳥の尾張の國よりながくしき野山をこへて清水へ、日毎々々のかちまふで下向にも参りにもみちはかはらぬ五條坂、互ひに顔は見しり合ひ、いつ近付になる共なく羽織の袖のほくろびちよつと時雨のから傘お安い御用雪のあしたの煙草の火、寒いにせめてお茶一ぶくそれがこふじて酒一つ、こつちに思へばあちからもくどくは深い観音經ふもんぼん第廿五日のよさ、必ずとはふれの詞をむすぶなごやおび終りなければ初めもない、あぢな戀路を楽しみしに壽永の秋の風立て須磨や明石のうら船にこぎ放れ行ゑんの切れめ思ひ出すも、つかへのどく、ア、うとましやと語りける

翠帳紅閨に枕ならぶる床の内、なれし衾の夜すがらも四つ門の後夢もなし、さるにても我がつまの秋よりさきにかならずとあだし詞の人心、そなたの空よと眺むれどそれ〴〵と問ひし人もなし。

よしのだつたの花紅葉更科越路の月雪も夢とさめては後もなし、あだしのゝ露とりべのゝ煙はたゆる、時しなき是が浮世の誠なる。

觀賞おぼえ

昭和十六年十月 5 日

蘆屋道満大内鑑

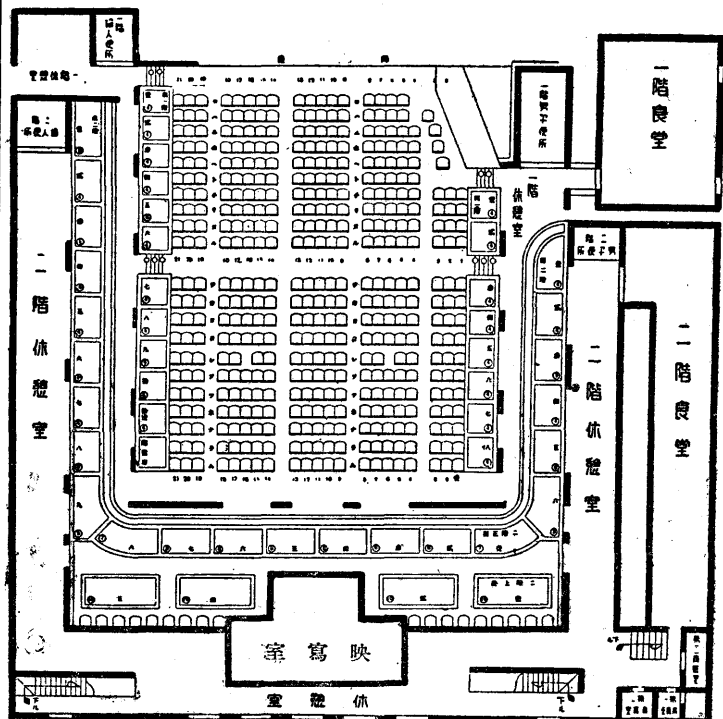
日 吉 丸 稚 櫻

櫻 鏢 恨 鮫 鞆

鷗 山 古 跡 松

壇 浦 兜 軍 記

# 文樂座御場席案内



御・観・覽・席は大部分椅子席になつて居りますからお一人でも御愉快に洋服でもお樂に御見物が出来、またお出入が御自由です。

前・賣・切・符・壹等席のお切符は五日前から發賣致します、また五日以後のお切符も壹等席に限り御豫約申し上げますから上圖の座席表に依つてお早く御望みの御場席をお申し込みになればお心のまゝにお好きな處が御自由にとれます御用命のお節お呼出しの電話は

南四七壹番で御座ります

切・符・賣・場・右指定席切符は當日前賣とも正面西側本家入口にて發賣して居ります

二等席・三等席切符は當日正面入口にて發賣致します

# 内案御居芝の月十

| 川湊戸神<br>場劇竹松<br>四〇四四川漢話電                                  | 條四都京<br>座南<br>五五一國紙話電                                                                  | 堀 頓 道<br>座 角<br>二一二二南話電                                                                   | 堀 頓 道<br>座 中<br>九七二一南話電                                                      | 阪 大<br>座伎舞歌<br>六二八二戎話電                                                    |
|-----------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------|
| 日初日一<br>開二午正晝<br>演回時五夜                                    | 日初日一<br>半時四後午<br>演開                                                                    | 日初日一<br>開二午正晝<br>演部半時四夜                                                                   | 日初日一<br>開二午正晝<br>演回時五夜                                                       | 日初日一<br>開二午正晝<br>演回時五夜                                                    |
| 梅<br>澤<br><br>昇<br>一<br>座                                 | 本<br>流<br><br>新<br>派                                                                   | 中村翫雀襲名興行<br>關西大歌舞伎                                                                        | 厚<br>生<br><br>劇                                                              | 松<br>竹<br>家<br>庭<br>劇                                                     |
| 第一 隣家の夫婦<br>第二 千隄の川風<br>第三 故山の還る<br>第四 森の石松戀              | 第一 親の花<br>第二 草の<br>第三 髪の下地                                                             | 信州川中嶋 (晝の部)<br>勝敗二十餘年<br>録倉三代姥<br>堀山代<br>藝菅原傳授宅 (夜の部)<br>茶道一握手習鑑<br>秋茶の屋七<br>草女男          | 第一 花かご (はなご)<br>第二 忠賣<br>第三 烈<br>第四 四十八士家屋                                   | 第一 千客の万來<br>第二 張子の人の犬<br>第三 鯨と醫者の生<br>第四 氣村を揉む母親<br>第五 氣村を揉む母親            |
| 一等席 一圓三十錢<br>二等席 八錢<br>三等席 五錢<br>四等席 三錢<br>觀覽料 十錢<br>(稅別) | 特等席 四圓五十錢<br>一等席 三圓三十錢<br>二等席 二圓三十錢<br>三等席 一圓三十錢<br>四等席 一圓<br>五等席 四錢<br>觀劇料 十錢<br>(稅別) | 特等席 五圓二十錢<br>一等席 四圓二十錢<br>二等席 三圓二十錢<br>三等席 二圓二十錢<br>四等席 一圓二十錢<br>五等席 一圓<br>觀劇料 十錢<br>(稅別) | 特等席 四圓五十錢<br>一等席 三圓五十錢<br>二等席 二圓五十錢<br>三等席 一圓五十錢<br>四等席 一圓<br>觀劇料 十錢<br>(稅別) | 特等席 三圓五十錢<br>一等席 二圓五十錢<br>二等席 一圓五十錢<br>三等席 一圓<br>四等席 四錢<br>觀覽料 十錢<br>(稅別) |

# 開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

當文樂座は 既に皆様御承知の通り我大阪に於ける郷土藝術、三位一體の人形淨瑠璃の日本唯一の公演場である。

文樂座人形淨瑠璃は 嘗に大阪の誇りとする舞臺藝術のみならず我

日本に於ける古典舞臺藝術の至寶として世界に誇るべきものであります。従つて開場毎にこの大使命が全う出来ますやう、皆様の御期待に

背かぬ様、皆様に御満足して頂けるやうと一同不斷の努力を致して居りますが尚御氣付きの點は御客様の御聲として承りたく存じます。

御携帶品は 正面一階に御預り所が御座ります。お帽子は椅子の下に

設備がありますからそれへお願ひ致します。お歸りは混雜致しますからお服物は成べく終演一幕前に御受取願ひます。

貴重品は 各自にお持ち下さい。お場席お立ちのときは御携帶願ひます。お煙草は 一階二階廊下に喫煙台を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。お席では御遠慮下さい。

お食事は 西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室が御座居ます。

賣店 は 二階東側と一階西側休憩所に御座ります。

お化粧とお手洗 殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座ります。

場内にて 寫眞撮影は絶對にお斷り致します。

御休憩の間は 一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座ります。

お出口は 下足札赤札は正面西本家人口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

案内人は 胸に番號人マークを附けて居りますから御用の節は御申附け下さい。其他一般従業員に不行届の點は御遠慮なく御注意の程お願いいたします。

出演者 病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから豫め御諒承願ひます。

當座は此度皆様へのあらゆるサービス機關として案内部を特設いたしました。

人形淨瑠璃についての御質問・各種團體御觀賞會・又は諸種の會合席上へ出張公演等御相談に應じ、よろづ御案内申上げる事に致しました。御一報次第参上、どうぞ御利用下さいませ。

専用電話南⑦三七八八番

松竹株式會社

文樂座

支配人 下村清次郎

支配人 下村清次郎

